



柳田國男著
關敬善著

「日本民俗學入門」

陳紹馨

民謡臺灣が發刊されてからまだ二年足らずであるが、その描いた波紋は相當に大きい。月々の探訪の會に參加する者が多數に上り、しかも、づれも非常に熱心であるのを見れば、民謡の心がかなり深くこの島にうきつけられた事が察せられる。だが、臺灣はやはり民俗研究の盛地である。熱心に民俗を調べて見ようとしてもお互に素人で、どういふ問題にどう手をつけてよいか、迷ふことが少くない。この時に當つて「日本民俗學入門」は誠に恰好な手引引のである。

本書は三〇項に別れており、第一項緒論と第三〇項結語の他は、次の

二十八項に亘つて民俗の各方面の問題を扱つてゐる。二、住居、三、衣服、四、食制、五、漁業、六、林業、狩、七、農業、八、交通、交易、九、贈與、社交、一〇、勞働、一一、村組織、一二、家庭、一三、婚姻、一四、誕生、一五、葬制、一六、年中行事、一七、神祭、一八、童戲、一九、童詞、二〇、命名、二一、言葉

二二、諺語、二三、民謡、二四、語り物、二五、書籍、二六、妖怪、閻魔二八、鬼、占、禁、呪、二九、醫療。各項について先づ問題に關する要領のよい説明があり、次に探訪者が質問すべき詳細な項目をかゝげ、更に適當な参考文献を擧げてゐる。試みに第一〇項の勞働をあけて見ると、

我が國の社會情勢が勞働と關係するところが多いこと、家族組織もまた一つの勞働形態であり、家も村もいはず勞働組織であること、昔は一人の統率者の下に一群の勞働者が統一されてゐたが、漸次に個人本位にならうとしてゐること、このかしらを中心とする勞働團體が先づ農業方面に於て最も早く崩れ、その後に發生

したのが親方を中心とする勞働組織であること、その他勞働と民謡、女性と農業、給與、休み等の問題に關する解説がある。この豫備知識だけでも相當なものであるが、更にこの豫備知識を以て探訪調査する場合には何からどう手をつければよいか、質問項目に於て手をとる様に忠切に指示してゐる。

本書の質問項目を無論そのまま臺灣に適用する際には行かないが、併し尚絶好な参考書たるを失ふものではない。一應本書によつて進んで行けば臺灣の特殊性が直ちに察見されるに至ると思ふ。地方の同好の士が本書を手引として手分けして各方面の探訪調査をするか、或ひは同一問題を皆で調査した上で検討した記録を作り、それと民謡臺灣に發表する様にしたら臺灣の民俗研究はぐんぐん

橋浦泰雄著

「民間傳承と家族法」

中村哲

断片的な民俗資料も之を採集してゐたが、漸次に個人本位にならうとしてゐること、このかしらを中心とする勞働團體が先づ農業方面に於て最も早く崩れ、その後に發生

する部面において如何なる役割を演じるかが問題となる。探訪が深まるにつれて、民俗の探訪が單に懷古的、或ひは好事家的なものでなく、現代的なものになり、民俗學とは何ぞやその對象方法使命如何の様な根本的な問題がおのづから提出される。而して本書はこれらの問題につき結論と結語で適宜に論述してゐるのである。本書の我が臺灣の民俗研究に於けるところ蓋し持くないと思ふ。(昭和一七年八月刊、B6判、四七七頁、改訂版、價二圓五十錢)

著者は柳田國男氏の民間傳承の會の系統の人。この會の民俗探訪の記録をこの人なりにまとめてあげたもので、その内容は一、家と遙、二、親と子、三、婚姻から離婚まで、四、